

# ネパールと対馬の事例からみる土着ミツバチと人間のかかわり

## —マイナー・サブシステムの視点から—

細貝 瑞季

キーワード： マイナー・サブシステム、地域社会、土着ミツバチ、半構造化インタビュー

### 1. はじめに

ミツバチと人間のかかわりは先史から続くといわれ、世界中で規模こそさまざまではあるが、現在に至るまでミツバチを対象とした生業活動が営まれている。その生業活動は、野生のミツバチ（以下、土着ミツバチ）のコロニーから採蜜するハニー・ハンティング、土着ミツバチを飼育する伝統的な養蜂（以下、伝統的養蜂）、ミツバチの生殖を人間が管理し飼育する近代養蜂の3つがある。自然と人間との直接的な関わりの中で営まれるハニー・ハンティングと伝統的養蜂は、マイナー・サブシステムという活動とみなされる。マイナー・サブシステムとは、土地固有の自然環境において生活の周辺的な領域で営まれる副次的な生業であり、活動の担い手たちに情熱と誇りをもって受け継がれてきた生業活動である。「遊び仕事」や「小さな生業」といった言葉で説明されるマイナー・サブシステムの中でも、より地域固有性が強い土着ミツバチを対象とした生業活動は、地域社会を考える上で積極的に注目を集めてこなかった。

### 2. 研究の目的

地域の特性に強く依存するマイナー・サブシステムとしてのハニー・ハンティングと伝統的養蜂に焦点をあて、その実態を把握することで、それらの活動が地域社会においてどのような役割を果たしているのかを明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の概要と手法

長い歴史を持つといわれているネパールのラムジュン郡にあるブジュン村で行われているハニー・ハンティングと、長崎県対馬市における伝統的養蜂を研究対象とした。ブジュン村では2012年3月と9月、対馬市では同年7～8月と10月に現地調査を実施し、それぞれハニー・ハンティングと伝統的養蜂に取り組んでいる人たちを対象とした半構造化インタビューと、それらマイナー・サブシステムの参与観察を行った。

### 4. 研究の結果と考察

土着ミツバチを対象としたマイナー・サブシステムにおいて、土着ミツバチをどのように捉えているかという点については対象事例地域で差がみられた。それは自然の巣と直接対峙するハニー・ハンティングという行為と、ミツバチを人間の領域に住まわせる養蜂という行為によって培われる自然観の差によるものであると考えられる。一方、地域社会における役割は、どちらにも共通して活動そのもの自体と、活動の実施に必要な技術や知識の継承のために、地域の人々の世代を超えた交流が促進されている、ということが明らかになった。ブジュン村の事例では、ハニー・ハンティングへの参加が地域に暮らす上での義務として位置づけられているため、活動が行われることで地域の人々が交流する機会が必然的に創出されていると考えられる。また対馬市の事例では、土着ミツバチの飼育者の間で秋の採蜜時や飼育者の不足の事態の際に、相互扶助がはたらくネットワークが機能していることから、伝統的養蜂が人と人を繋ぐ役割を果たしていると考えられる。以上のことから、土着ミツバチを対象としたマイナー・サブシステムは、その活動が行われている地域において、人々の社会関係を強化する機能を果たしていると推察できる。